少年達と犬達
SYOUNENTATI TO INUTACHI
Ⅲ
AUTHOR KANTO
原作：カント
ILLUSTRATION TYAZAKURA
イラスト：茶桜
Asian Kung - Fu Project

登場人物の紹介 CHARACTER

ショウタ

本編のヒロイン。ショウタ、サトシと同じ孤児院で育った、心優しい温和な少又。三人の中では妹のようなポジションで、分からないことは何でもサトシに質問しようとする無垢にある。ショウタたちに連れられてやってきたゲーム内で、まさかの猫化を遂げる。
とある事件によってショウタと離別してしまうが……。

サトシ

本編の主人公。運動神経が良く、また明るい性格で、誰からも好かれる少年。だが、頭の方はあまりよろしく無い。ノゾミ、サトシとは幼馴染で、彼らとは同じ孤児院で育った。
仮想空間で敵と戦うアーケードゲーム『Avalon』の新ステージにノゾミ・サトシと共にダイブする。ゲーム内では『勇者』として村人達に迎えられた彼だが、ゲーム三日目、変貌した幼馴染と対峙することに……。

ノゾミ

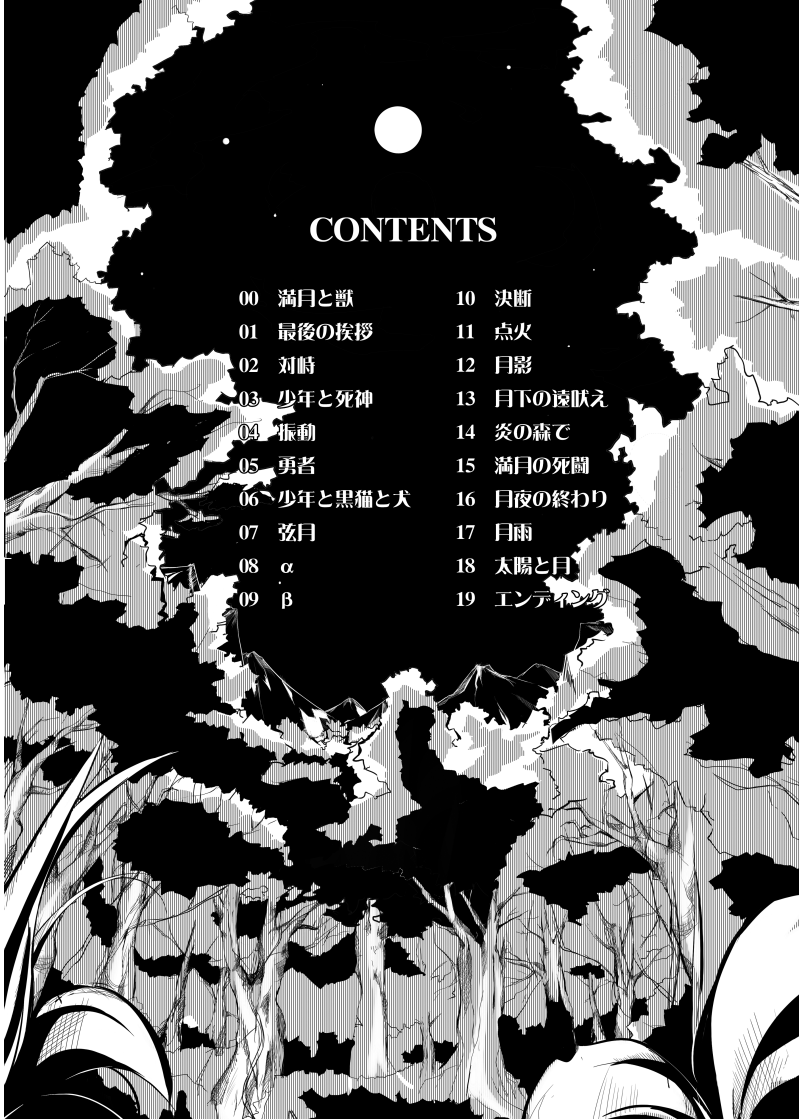
ショウタ、ノゾミと同じ孤児院の出身で、彼らの幼馴染。穏やかで、勉強の出来る優等生。運動は苦手だが、その人柄と知性が、運動音痴のマイナス分を多分に カバーしている。ショウタたちと共にゲーム内にダイブしたはずが、彼だけが別の地点からのスタートとなっていた。
ゲーム三日目、幼馴染二人と再会を果たす彼だが、炎とアバタイトを操る魔法のような力を身につけた彼は、ある事実を二人に突きつける。

少年

目的も正体も不明の少年。ショウタたちのやって来たゲーム内で、何やら一人で行動しているようだが……？

■ 前回までのあらすじ

今より少しだけ未来。ショウタ、ノゾミ、サトシの三人は、人気の仮想現実体感ゲームをプレイすべく、行列に並ぶ。だが、彼らがプレイを始めたその瞬間。世界は崩壊した。それから、遥か時を超えて。世界崩壊の瞬間に立ち会った三人の少年少又は、とある孤島で目を覚ます。ゲームの設定通りの格好となったショウタとノゾミは、アバタイトと呼ばれる化け物に襲われている村を、『勇者』として救う事となる。当初はゲームの中だと信じ込んでいた彼らだが、その考えは村人・デュアレイの死、そしていち早く事態に気付いていたサトシとの遭遇により、崩れ去る。変貌し、アバタイトと炎を操って自分達を襲ってくるサトシの手によって、離れ離れになるショウタとノゾミ。だが、彼らは二匹の狼によって再び巡り合う。アル、ベート。魔物と呼ばれる、人の言葉を話す狼。事態を確認しあう彼らだが、そこへ、植物を操る不思議な少年が現れる。少年は魔物を追っており、そしてサトシと敵対関係にあった。二人の幼馴染を死なさないため、そして元の世界に帰るため、走りまわるショウタ。だが、自分が来た世界が、自分達の世界よりも遥か未来だと気付き、彼は絶望する。『未来から過去へは、絶対に帰れない』不信感を持った村人達に牢の中へと閉じ込められるショウタ。
無数のアバタイトと、少年に追われるノゾミ、アル、ベート。少年達と犬達の物語は、最終局面を迎える──。



CONTENTS

00　満月と獣
01　最後の挨拶
02　対峙
03　少年と死神
04　振動
05　勇者
06　少年と黒猫と犬
07　弦月
08　α
09　β
10　決断
11　点火
12　月影
13　月下の遠吠え
14　炎の森で
15　満月の死闘
16　月夜の終わり
17　月雨
18　太陽と月
19　エンディング

00　満月と獣

――遠吠えが、黒々と広がる木々の間を、風のようにすり抜けていく。

美しい遠吠えだった。

空に浮かぶ、真ん丸な黄金。そこから降り注ぐ、秋雨にも似た月光の筋。冷えた大気を労るように、崖の向こうに見える遥かな山々に語りかけるように、その遠吠えは遠く、高く、月の光と混ざり合う。

目の前の獲物に仲間たちと牙を突き立てていた彼は、不意に響いたその音色に、思わず顔を上げた。黒い、豊かな体毛を風に撫でられながら、彼はすぐ傍の丘の上――彼らの位置から十数メートル離れた、突き出た崖の先へと、目を移す。

奏者は、そこにいた。月光を雨のように浴びながら、その光に自身の真っ白な体毛を煌めかせながら。空の黄金を衝くように、彼女は真っ直ぐ、背を伸ばしている。

また、奏者が強く、喉の奥底を鳴らした。弧を描くように、それは時には強く、時には淡く、

澄んだ空気を伝っていく。

……ゆっくり、彼は歩き出した。音を立てぬように。響く歌声の中に、自身の粗雑な足音を混ぜてしまわぬように。

やがて、奏者の隣に辿り着いた彼は、そのまま無言で座り込んだ。リーダーとしての特権——群れの長として一番に獲物に食らいつき、その残りを群れのものに分け与える権利——を既に使用済みの彼女は、自身の傍らに座り込んだ黒い獣に気を取られることもなく、そのまま気高く、遠く吠える。

「——キミは凄いな」

しばらくして。幾度かの遠吠えが終えても、遥かの月を見上げたままの彼女へ、彼は言った。

白い奏者が、傍らの黒い獣へ、チラリと視線を寄越す。

「……何よ、急に?」

「なに。率直に、感じたことを言ったまでさ。キミは凄い。間違いなく、この群れの中のリーダー……最高の存在、αだよ。

いや……もしかしたら、全ての『魔物』と呼ばれる生命の中で、最も輝かしいかも知れない」

真っ直ぐ、彼女を見つめる彼。

鈴々と、近くで虫が鳴いた。

「……分かってないわね」

しばしの、沈黙の後。……彼女はそう言って、小さく笑った。

満月の、月光の、音色の中で。

静かに、そしてどこか、寂しげに——。